

# 生存科学研究ニュース

VOL. 14. NO. 5 1999. 9. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1  
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

## 第3回銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズ 報告

銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズの第3回が、1999年8月26日（木）18時より、生存科学研究所会議室にて開かれた。

「反“偽科学”者の『生きる』」と題して、元東京大学医学部講師の高橋暁正氏による報告が行われた。高橋氏は1918年生まれの81歳。わが国の薬物体系の非科学性を厳しく批判した草分けで、71年に「薬を監視する国民運動の会」を作り、機関誌「薬のひろば」を100号にわたって発行してきたことで知られる。

高橋氏は「何もはじめから反“偽科学”者になるつもりだったわけではない。ちまたにあふれる偽科学の誤りを正しているうちに、そうならざるを得なかった」と振り返る。氏がこれまでに批判してきた偽科学のトピックスは、合計すると約100項目にもものぼるが、それでもなお、批判し残したトピックスが3

つあるという。今回のセミナーではそのうちの2つ、すなわち、「インフルエンザ対策としてのワクチン接種」と「フッ素による虫歯予防」に絞って、なぜそれが誤りであるかを豊富な資料をもとに解説された。

詳細は紙面の関係上省略するが、インフルエンザワクチンに関しては、抗原変異を繰り返すインフルエンザウイルスでは、ワクチンにより誘発される抗体産生は初回感染株の記憶に対応しているというデータを示した上で、その結果として血清学的診断には原理的疑問がある上に、有効性があるかどうかを調べるためには、ランダム化比較試験（RCT）が不可欠であるはずだとした。フッ素による虫歯予防に関しては、フッ素による歯の形態学的縮小や斑状歯の増加などの悪影響がみられるため、虫歯予防の目的で水道水にフッ素を入れたり歯にフッ素を塗るなどは、むしろ有害だと述べた。

高橋氏は、偽科学がいつこうにならな

いのは、結局のところ「evidence-based」（根拠に基づく）の考え方が日本に根付いていないからだと考える。さらにその背景として、儒教文化が根付き、歴史的にも市民革命を経験してこなかったわが国には、いまだ「個の確立」がないことを指摘する。

氏の年齢を感じさせないエネルギッシュな論説に触発されてか、参加者との質疑応答も活発だった。（津谷喜一郎/北澤京子）

#### 生存学研究会報告

平成11年7月11日（日）13時30分より、岡山県倉敷市の「ホテル倉敷」において「日本伝統文化消失の要因」をテーマとして、中国支部主催の第1回討論会を開催した。

今回は、地元、柴田病院院長・柴田高志氏のご尽力により、ゲストの発題者として、財団法人大原美術館副館長・原道彦氏と倉敷考古館館長・間壁忠彦氏を迎え、研究会からの発題者としては、柴田氏のほか、藤原成一氏とト部文麿氏が参加した。さらに会員が筆者を含め3名参加し、各発題者の議論を受けて活発な討論を行った。

討論会はまず、柴田氏の司会により、原氏から大原美術館の設立経緯についてお話を伺った。大原孫三郎が、ヨーロッパへ留学させた児島虎次郎に、当時はまだ評価の定まっていなかった印象派などの「本物」の絵画を買うように指示したのが大原美術館のはじまりであり、孫三郎に先見の明があったこと、また、大原総一郎は美術館を「美しい自然の見方を教えてくれる所」と位置付けたことが今日の倉敷の伝統を支えていることを話され

た。続いて、間壁氏は考古学とは、文化を人間の営みの総体と捉えるものであるとの立場から、5世紀には日本最大級であったと考えられる作山古墳などの岡山の遺跡を紹介されながら、日本の伝統文化としての米作り農業に日本人の根幹が見られることを示された。特に、「道具」が機械化の中で見ることができなくなったことに日本文化の衰退の様子が現われていると話された。

上記お二人の発題を受け、藤原氏は、倉敷の「美観地区」という名称や「チボリ公園」開設に対して、「伝統」の意味を問うことから問題を提起し、「型」を継承するという意味での伝統は、芸能芸事の世界になお残っているが、大事なはそのような伝統でなく、日本文化のベースとなった自然観、人生観、美意識などの内なる伝統であるとして、古典を引用しながら論じ、かつそのような伝統の今日の状況に説き及んだ。また、ト部氏は日本の演劇文化が失われていることをめぐって「伝統」の意味を再考することの意義を話された。

この後、参加者全員での自由討論になったが、伝統の町・倉敷に出現したチボリ公園の受け止め方などをめぐって、地元の先生と外来の先生方間で意見が異なることもあり、特に地元の先生方が、チボリ公園を好意的に受け止められているのが印象的であった。ここには、「伝統」とはただ古いものを後生大事に守り続けることではなく、大原孫三郎の先見の明に見られたように、未来への眼差しこそが伝統を築き上げていくものであるとの思いが示されているように感じられた。

討論会後は、柴田氏のご案内で美観地区での見学会が持たれた。（大林雅之記）

生存科学講座へのお誘い

今年度は《人・つながり・21》をメインテーマに生命倫理について考えます。下記のとおり企画いたしましたので多数のご参加をお待ちしています。

第1回

テーマ：生存・生まれる

出生前診断、臓器移植、遺伝子治療など科学技術の急激な進歩が私たちの生命を薄くする。新たな生命観とは？

日時：9月25日（土）14：00～16：30

会場：教文館ビル9階

（地図参照）

講師：森岡 正博 氏

大阪府立大学総合科学部教授

研究テーマは、生命学、哲学、現代思想、科学論。

著書『宗教なき時代を生きるために』『脳死の人』『生命観を問いなおす』他

梅園 忠 氏

千葉県医師会副会長・内科医

生存科学研究所理事として、長年『生存の理法』を追求。

著書『21世紀の医療を求めて』

『終生田医』他

第2回

テーマ：生存・生きる

日本人は生命倫理にどう対応してきたのか？

日時：10月23日（土）14：00～16：30

会場：教文館ビル9階（第1回と同じ）

講師：ホアン・マシア 氏

上智大学神学部教授

スペインから1966年来日。

著書『バイオエシックスの話(正・続)』『生命の未来学』他

米本 昌平 氏

三菱化学生命科学研究所社会生命科学研究室長

研究テーマは先端医療で、環境問題への関心も強い。

著書『バイオエシックス』『先端医療革命』『知政学のすすめ』他

第3回

テーマ：死・そして未来

遺伝子の中には死（アポトーシス・アポビトーシス）が2重にプログラムされている。性と死はコインの裏表？

日時：11月13日（土）14：00～16：30

会場：教文館ビル9階（第1回と同じ）

講師：向井 万起男 氏

慶応義塾大学医学部助教授

宇宙飛行士向井千秋さんの夫でもあります。著書『君について行こう』『女房は宇宙を飛んだ』他

大島 清 氏

愛知工業大学基礎教育系教授

「人間の性とはエロスを全うする行動」というのが、氏の論の本質。

著書『男の器量はHな脳でできる』他

参加費：会員は無料。

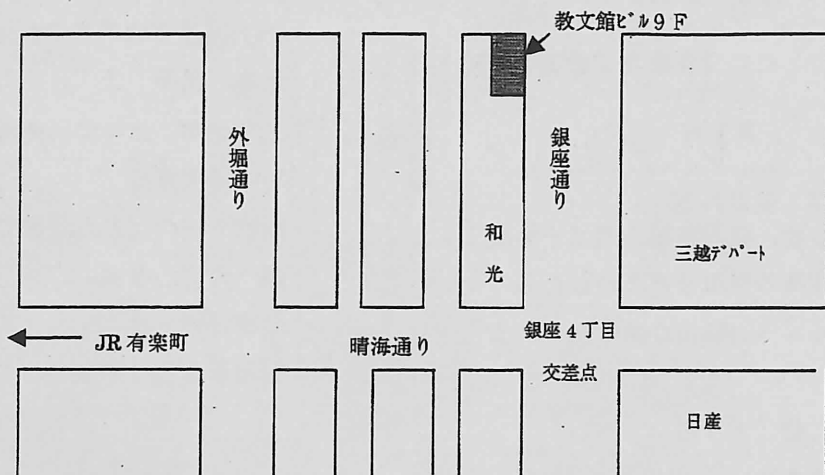
一般の方は1回につき資料代として1000円。

参加ご希望の方は、事務局まで、はがきまたは、ファクスでお申込み下さい。（ファクス 03-3567-3608）

講座会場ご案内

教文館ビル9F

(生存科学研究所隣接ビル：銀座駅徒歩3分、JR有楽町駅徒歩10分)



会員寄贈図書



終生田医  
梅園 忠 著  
(千葉県医師会副会長)  
1999年6月23日発行  
中央公論事業出版  
制作

墓碑銘とでも申しましょうか。陸の孤島に30年。世界のみやこみやこも見ず、何千メートルの高さも、何十メートルの深さも知らず。只只井の中の蛙。無能無才の一筋。義務であった、と思うしかありません。子供達よ御免。捧げる人も無く、読む人もあらばこそ。蛙の義務。お笑ください。

巻頭 一ごあいさつ一より

学術誌『生存科学』原稿募集について

学術誌『生存科学』第10巻A号をお届けいたしました。ご高覧ください。

なお、編集委員会では会員の皆様のご投稿をお待ちしております。

生存科学A号（毎年3月31日締切）は自由な意見の発表の場として、また、B号（毎年9月30日締切）は論文、研究ノート等学術的な内容を主としており、論文は査読制度を採用しております。研究発表の場として奮って投稿下さるようお願いいたします。

研究所日報

- 7月11日（日）生存学研究会（於：倉敷）  
「日本伝統文化消失の要因」
- 7月12日（月）第2回常務理事会
- 7月16日（金）生存科学講座打ち合わせ
- 8月5日（木）学術誌『生存科学』第10巻A号発行
- 8月26日（木）第3回銀座ナイトセミナー  
「反偽科学者の『生きる』」
- 8月29日（日）生存学研究討論会（於：彦根）  
「生態学(環境)から哲学へ」
- 9月9日（木）第3回常務理事会